

# JICA 横浜国際センター2016 年度課題別研修 「インクルーシブ教育/特別支援教育の推進」

## ワークショップ「障害者がみんなといっしょに学び合うことについて」

2016年9月13日 於 ラポールひらかた

JICA インクルーシブ教育/特別支援教育研修に関わって3年目になります。今年はアフガニスタン、バングラデシュ、モンゴル、ブータン、ミャンマー、モザンビーク、スワジランド、レソト、バヌアツ、トンガ、ドミニカ国の11か国から15人の研修員が参加しました。

ワークショップの大まかな流れは、次のようなものです。

- ①映画『風は生きよという』から編集した10分間の映像を観て、人工呼吸器をつけた17歳になるユウタロウさんを知る。
- ②ディベート1「ユウタロウさんはみんなといっしょに教室で授業を受けているが、学習していると思うか、どうか？」  
A：学習している B：学習していない の二つの立場のグループに分かれてロール・プレイのディベート。
- ③ユウタロウさんと両親が入場。
- ④母親のマリさんから、優太郎さんの出産、障害の特性、在宅生活、施設に通園、支援学校、地域の公立中学校への入学、中学生活の話。
- ⑤ディベート2「ユウタロウさんと生徒たちはコミュニケーションできているだろうか？」  
A：コミュニケーションできていない B：コミュニケーションできている の二つの立場のグループに分かれてロール・プレイのディベート。
- ⑥マリさんから、高校受験と現在の高校生活を報告
- ⑦フリー・ディスカッション（自分の考えを交流する）  
「お母さんの話を聞いていると、専門家や専門的知識、技能、施設や設備があるからうまくゆくというものではない。むしろ壁になってしまう。『関わり』の中でコミュニケーションが生まれ、『関わり』の中で学習が生まれる。『関わり合う』『いっしょにいる』ことからしかはじまらない、と言われているように聞こえるが、どう考えるか？」
- ⑧研修員とユウタロウさんとの質疑応答。
- ⑨ファシリテーターのまとめ。
- ⑩せっかくだから、参加者みんなで記念撮影。



研修員が代われれば当然ワークショップの雰囲気も違います。今年は静かに言葉を交わす滑り出しでしたが、ユウタロウさんが入場すると会場の空気がガラッと変わりました。積極的な話し合いが生まれます。

ひとりの女性研修員は、「同じように扱われないほど公平でないことはない…」と発言しながら、言葉を詰まらせてしまい、席を離れました。祖国の現状や、子どもたちの顔が浮かび、重なって胸を詰まらせたのかもしれない。

また、ある女性研修員は、「アフリカの私の国では、母親が障害のある子を産んだら、周りからお母さんの問題だといわれる。父親は自分の問題ではないと行ってどこかへ消えてしまって、問題だけがそこに残ってしまう。ダイサクさんに（ユウタロウさんの父親）祝福の言葉を言いたい。アフリカのお父さんたちにダイサクさんのことを知らせたい。いかに女性たちにとって男の人のサポートが必要なのか、ということだと思います。」と発言されました。

ダイサクさんは、「…父親としての役割はなんなのかと考えて、特に学校や教育委員会と話すときに積極的にかかわるようにしてきました。でも、日本でも父親の関わりはそんなに多くはありません。…それぞれの国でいろんな事情があるだろうけれど、日本だからできるではなく、それぞれの国でできることがあるだろうから、優太郎の事例を持ち帰ってもらって、役立ててもらえればと思います」と答えました。

最後にユウタロウさんと研修員との質疑応答、対話の時間をつくりました。

「…元気ですか？ 朝食は食べましたか？ 会えてうれしいです。あなたは僕に会えてうれしいですか？ 愛しています。 国へ帰ったらあなたのことをみんなに知らせますね。…」

一言一言語りかけるたびに、ユウタロウさんの横に並ぶ質問者は覗き込むように顔を見つめ、他の人はスクリーンに映るユウタロウさんの表情に目を凝らします。

大きく、ゆっくりと、そしてはっきりと、ユウタロウさんのまぶたが開閉します。大きく見開いた真っ黒な瞳が、相手を見つめるように動きます。その動作の中に、一年前のユウタロウさんとはちがう姿を確かに感じました。それを何と表現すればいいのでしょうか。成長、育ち、歩み…、まだ的確な言葉が見つかりません。でも確かにユウタロウさんは、「しっかりと地に足つけて」（ストレッチャーを使っているのにね、なんという表現でしょうか？）歩んでいます。

最後に進行役として次のようなまとめの話をしました。

「私はみなさんと一緒にワークショップをやらせていただいて、『豊かさとはなにか』と、今考えています。私たちの日本という国は、みなさんの国と比べれば、教育に使われるお金も多いでしょう。施設や設備もいいものがあると思います。専門的知識や専門家もたくさんいます。だけど、本当に日本の障害者たち、障害のある子どもたちは幸せなのかと、今考えています。

ご存知かもしれませんが、7月26日に神奈川県相模原市で160人も入所していた障害者施設で殺傷事件がありました。」と語ったとき、研修員の間には大きな反応がありました。彼らが来日する前の事件なのですが、世界中の人たちにニュースが配信され、衝撃を与えたことを実感しました。

「…19人が殺害され、26人が重軽傷を負いました。日本でもまだまだ家族から離れて遠くの施設で暮らさねばならないたくさんの障害者がいます。小・中・高校でも、障害のある子どもと障害のない子どもが、いっしょに学ぶことがまだまだ当たり前になっていません。

そう考えたら、お金も施設や設備も豊富にあるかもしれないけれど、本当に障害者にとって住みやすい社会なのか、子どもたちにとって学びやすい学校なんだろうかと考えざるを得ません。

だから、施設や設備や専門的知識がないからインクルーシブ教育ができないということではな

いと思います。それはみなさんの国も私たち日本も、同じではないでしょうか。つまりインクルーシブ教育が『できるか、できないか』と考えるのではなく、インクルーシブ教育を『やろうとするのか、やらないのか』、インクルーシブ教育を『やりたいのか、やりたくないのか』が、いちばん大切なことではないのかと、私は考えています。…」と話しました。

「せっかく出会ったんですから、ユウタロウさんを囲んで今日の参加者全員で記念写真を撮りませんか」と声をかけると、みんな大賛成。表情を輝かせたすてきな写真が撮れました。

〈以下に写真を添付〉

#### ◆ディベートを開始



#### ◆ユウタロウさんと両親も参加する





◆ 発言が続く





◆ユウタロウさんと対話する



◆出会いを記念してユウタロウさんを囲んで撮影

